
コーレアの鐘が鳴る

朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーレアの鐘が鳴る

【Nコード】

N0667V

【作者名】

朔

【あらすじ】

元々別H・Nで自サイトやSNSで連載小説として掲載している作品です。

無断転載ではないのでご了承下さい。また、作品は改稿中ですのでこちらで掲載後も修正や加筆する可能性があります。感想やアドバイスなど宜しくお願いします。

あらずじ

魔法使い達の存在がおとぎ話になりつつある時代。

物心がついた頃、主人公・アーシィ・パルフレグは魔法使いに弟子入りすることを夢見ていた。しかし、生まれてこのかた彼等を見たことがない。家出同然でフラフラと魔法使いや魔女が使っていたであろう道具や書物を一目見ようと旅をしていた。

そんな中、十六歳の誕生日を迎えたと同時に『魔女の郷』という情報を得る。遙か昔、魔法使い達が探し求めた場所らしい。

だが、未だも誰もみつけたことがなく、どういう場所であるか不明。

だったら私が第一発見者になってみせる

ノーヴァル大陸の南東に位置するマーフェ国は、魔法の歴史や記録が残っていることで有名である為、手掛かりを求めてアルテという街に向かうアーシィだが……。

1. プロローグ

ゴロゴロ ……

暗雲から無数の稲妻が走り、地面を叩き付けるような雨が降り注ぐ。

鬱蒼とした森の中、自分の背丈より小さな洞窟を見つけたアーシイは息を切らせながら駆け込んだ。

洞窟の中は人や生き物が居た形跡は無く、岩肌には所々コケが生えていた。

薄暗いし気味が悪いけど、雨に打たれて風邪を引くよりマシね。

「夜になれば止むと思っただけどなあ」

そうぼやいて何度も深呼吸をして息を整える。

身体は雨に打たれ続けたせいで体温が下がり、編み込まれた金色の艶やかな髪は毛先から雫がポタポタと落ちていった。

早く温まらないと、本当に風邪を引いてしまうわ。

幸いなことに、洞窟の地面には木の枝や枯葉が落ちている。これをかき集めれば焚火が出来そうだ。肩に掛けていた荷物を置き、体を屈めて木の枝や枯葉を集め始めた時だった。

「あれ？ この枝、真っ白だ」

ふとアーシイの目にとまった白く小さな木の枝。

手に取ると他の枝に比べれば泥や土埃で汚れていない。寧ろ艶があり綺麗なのだ。

誰かが白く塗って捨てたのだろうと思ったアーシイだが、この洞窟は無人。周辺には町や村など無い。

「もしかしたら魔法使いの杖だったりしてね」

ノーヴァル大陸にはかつて魔法使いや魔女が存在した。時代と共に、彼等の存在はおとぎ話になりつつあるが……。

この白い枝はなんだと思う？ と人に問えば、木の枝だと答える

だろう。

しかしアーシイは違う。

彼女は物心がついた頃、魔法使い達に憧れ弟子入りすることが夢だった。

存在しないなら、せめて魔法に使用された道具や書物を見たい。

その思いは強く、両親の反対を押し切って実家を飛び出したのだ。

見知らぬ町や村で情報収集しては宿や民家に泊まる。時と場合によつては野宿をした。

そして十六歳を迎えたと同時に、ある情報を得た。

魔女の郷

遙か昔、魔法使い達が探し求めた場所らしい。

断言できないのは、未だに誰も見つけれないからだ。その為、
どういう場所であるのか誰も知らない。

それなら私が第一発見者になってみせる。

家出同然でフラフラと旅をしてきたアーシイに明確な目標が出来た矢先、森で迷ってしまった。更に土砂降りの雨に見舞われ今に至る。

「よし。火が点いた」

集めた木の枝と枯葉にマッチで火を点けると、洞窟の中が明るくなった。

茶色のパーカーを脱いで乾かす。

赤いキャミソールとショートパンツ姿になったアーシイは焚火の前に座り、燃やさなかった白い木の枝を改めて見る。

よく見ると文字が彫られていたが、かすれていて読めない。

それだけの理由で読めないのではない。憶測だが、古代文字のようだ。

「……怪しい。この枝の文字怪しいわ」

アーシイはじっと枝を見つめると、荷物から丸められた紙を取り

出す。それを勢い良く広げた。

そこにはノーヴァル大陸の地図が描かれており、所々アーシイのメモやマークが記されている。

そして大陸南東を指差して呟く。

「ここがマーフェ国。あと二、三日歩けばアルテに到着できる」

白い木の枝に視線を向け、説明するかのように喋り続ける。

「マーフェ国は魔法の歴史や記録が残っていることで有名みたいな。私はアルテっていう街に行けば、何かあると思ってるわ」

まあ堪だけどね、と付け足してゴロリと横になる。

朝になったら晴れてるといいんだけど。

弱まらない雨音を聞きながらアーシイは瞼を閉じた。

気付けば見渡す限り荒れ果てた土地に立っていた。

枯れ草が風に揺れ、大地には深く亀裂が入っている。

そして小ぢんまりとした木造の民家が何軒か目に入った。どうやら此処は小さな村のようだ。

だがアーシイはこの村に訪れた記憶が無い。それよりも人間……いや、生物の気配を感じない。

灰色の分厚い雲から見え隠れする太陽だけが、こちらを見ている錯覚に陥る。訳も無く恐怖心から身体が震えてしまう。

「ここはどこ？」

アーシイの弱々しい声が虚空に消えた。

先程まで雨宿りを兼ねて洞窟で横にな眠っていたはず。

もしかしたら、これは夢？

その疑問は確信へと変わった。片足で恐る恐る地面を強く踏むと、感触が無い。更に右手で地面を触るが、やはり感触は感じられなかった。

夢だと確信して胸を撫で下ろすのも束の間。

ふと気配を感じて振り返ると、遠方に幼い少女がこちらを見つめ

ている。

やっと人を見つけた。歳は十歳前後だろうか。

豪華なフリルが印象的な黒いワンピース。胸元には大きな白いリボン。腰まで長いウェーブがかった白銀の髪の毛は輝いて見える。

じつとこちらを見つめる緋色の瞳からは大粒の涙がこぼれていた。

幼いながら鼻筋の通った美しい顔が台無しだ。何故泣いているのか問うべく近寄った時だった。

「あ……れ」

視界に入る全ての景色や少女の姿が歪み、やがてアーシイは意識が遠のいた。

ぱちりと目を開けると、景色は見知らぬ村から洞窟の岩肌へと変わっていた。

アーシイは上体を起こして周囲を確認するように見渡す。

朝日が森や洞窟に差し込み、小鳥のさえずりが響く。昨夜の土砂降りだった雨が嘘のようだ。真つ青な空には雲ひとつ無い。

「やっぱり夢だったんだ」

今度こそ安堵したアーシイは赤いキャミソールの肩紐を直し、焚火の後片付けをしようと立ち上がった。

「あ、そういえば」

思い出したかのように呟き、手に持っていた小さな白い木の枝に目をやる。

「この枝を持っていたから変な夢見たのかも」

枝に話しかけても返事がある訳が無い。

ふうーと溜息を吐いてショートパンツのポケットに閉まう。

続けて焚火の後片付けをするアーシイだが、夢のことが気になつて仕方ない。

あの景色や空気はやけに現実味で気味が悪い。

少女の様子も普通ではなかった。

まるで絶望的な、この世が終わるのではないか。そんな恐怖感に包まれたからだ。

考えるだけ無駄かな

モヤモヤと曇った思考を振り切るように、乾いた茶色のパーカーを羽織り荷物を肩に掛けた。

「お世話になりました！」

洞窟の外へ出て礼を告げるアーシィの表情は、昨夜見た夢の疲労を感じさせない程明るいものだ。

予定では二、三日でマーフェ国のアルテに到着する。

忘れ物がないか確認し、スキップするかのように駆け出した。

あとで気付いたことだが、アーシィが迷い込んだ森はマーフェ国内だったらしい。既にマーフェ国に到着していたのだ。

森を抜けたすぐ目の前に、アルテの方角を示す看板が立てられていた。

「まあ予定通り物事が進むことなんてないわよ……」

そう自分に言い聞かせたが、少し調子が狂ってしまった。

2・疑心を抱いた午前十時

アーシイがアルテに到着したのは森を抜けてから半日だった。

マーフェ国の玄関と呼ばれる程の街だ。どこを見ても石木混造建築の民家がズラリと見受けられ、歴史を重んずる時計塔は午前十時の数字に針をさしていた。

今日は祭典なのだろうか。やけに道を行き交う人が多い気がした。

道なりに歩き続けると、普段は物静かであろう噴水が設けられた広場に辿り着く。

そこには商人達が大きな布を地面に広げ、品物を自慢するかのようにならべて通り掛る人々に声を掛けている。

広場を通り掛ったアーシイもそのうちの一人。

商人達に四方八方から声を掛けられ、引き攣った顔で手を振っては品物に目をやる。

しかし、あまり興味をそそるようなものではなかった。

これはマーフェ国外で仕入れた骨董品ね。あつちは安っぽい生地
の絨毯に装飾品……。

口に出して言わなかったが、どこで仕入れた品物かすぐに見抜けた。

安物を高値で売ろうとしている商人達の魂胆に呆れてしまう。

家出同然で旅をしてきたアーシイにとって、露店は初めて見るものではない。その中でも、ある商人は熱心に自分の目と感触で色艶形の歪みや損傷が無いか確かめる。そして仕入れた品物の歴史や、いかに価値のある物なのか客に説明する者もいた。

その商人の情熱に心を突き動かされ、護身用にと質素だが切れ味は抜群の短剣を購入した訳だ。

普段は茶色のパーカーで隠れて見えないが、腰のベルトに掛けられた短剣の鞘にそっと触れてみる。

この短剣のおかげで旅の道中、野犬や危険地帯から逃れられた。
あの時の商人のお陰ね。それなのにこの国の商人は……商売をする
以上、それくらい情熱を持って欲しいわ。

興味の対象を無くし、広場を去ろうとしたアーシィはあることに
気付く。

彼女は母国語しか話せない。ましてマーフェ国の言葉なんて知ら
ないのだ。

だが、こうして道を行き交う人々や商人達が何を喋っているのか
手に取るようにわかる。

まるでマーフェ国で生まれ育った人間みたいに

その時。

気味が悪くなり身体が震えるアーシィの背後から「泥棒！ また
泥棒が現れたぞ！」と男性の叫び声が聞こえてきた。

その声に思わず振り返ると、フード付きの黒いローブを羽織った
幼い少女が猛スピードでこちらに走ってくる。

背丈は小さく、白銀のウェーブがかった腰まで長い髪の毛に緋色
の瞳。

その両手には値札の付いた果物やパンなど抱えていて、どう見て
も怪しい。泥棒だ。

止めるべきだよな？ ううん、捕まえなくちゃ。

少女を捕まえようと構えたが、ふと昨夜の夢を思い出した。

荒れ果てた見知らぬ土地に立つ幼い少女の泣き顔。

今、猛スピードでこちらに逃げてくる子は、まさに夢で見た幼い
少女と瓜二つなのだ。もしかしたら同一人物かもしれない。

捕まえることを忘れ、呆然と立ち尽くすアーシィの横を走り過ぎ
ようとした幼い少女は、そのまま逃げ切ると思えば急に止まって振
り返る。

アーシィも確かめるかのように、ゆっくり振り返ると少女は目を

見開く。

「コーレア……ねえ、あなたコーレアよね!？」

凜とした甲高い声が響く。

少女はひどく動揺しているのか、両手に持っていた果物やパンを地面に落としてしまった。そして、か細い両腕でアーシイの身体を前後に揺する。

品物が勿体無いという思いはすぐに消え、アーシイも『コーレア』という名を聞いて目を見開く。

「何故、妹の名前を知っているの？」

「妹? ……じゃあ、あなたは誰？」

誰って、質問に質問で返されても困る。

確かに私には妹が居るわ。名前もこの子が言ったとおりコーレア。

アーシイも聞きたいことは沢山あったが、とにかく彼女の質問に答えた。

「私はアーシイ・パルフレグ。双子の妹の名前はコーレア・パルフレグよ」

「双子!？　ねえ冗談はよしてよ。あなたに兄弟なんていないじゃない」

幼い少女の目が怒りからか、若干吊り上がる。

アーシイは冗談など言っていない。事実を言っただけだ。

しかし幼い少女の言い方はまるで知り合いか、友人前提の会話に思えてならない。

「コーレアどうして?　私のこと覚えてないの？」

どうしてよ……と、悲しげに呟き緋色の瞳に涙を浮かべる。

この雰囲気だと私が泣かせたように思われるじゃない。

かと言って、いくら自身の名前を言っても幼い少女は聞く耳を持つてくれない。

「コーレア、私の名前まで忘れてしまったの？」

「忘れたというより知らないわ」

だからコーレアは妹の名前だつて言ってるじゃない！

心の中で主張するかのように叫ぶアーシィをよそに、少女は俯いて口を開いた。

「リイマ・ドルスタン。私の名前よ」

思い出してくれた？ と期待に満ちた顔でリイマはアーシィを見つめている。

もはや、どう反応すれば良いのか困惑してばかりだ。

そんな時

アーシィとリイマの元に中年男性が何かを叫びながら息を切らせ駆け寄ってきた。

口元の黒い髭に吊り上がった特徴的な太い眉毛。ぽっこり膨らんだお腹には調味料などで汚れた白いエプロンを巻いている。

「ま、待てえ！ ぜえ、はあ。この泥棒ネズミ！」

声から察するに、先程『泥棒！ また泥棒が現れたぞ！』と叫んでいた男性。

そして店主だろうか。盗まれた品が地面に転がっているのを見て怒りが増したようだ。

何度も息を整え、リイマのか細い腕をこれでもかといわんばかりに強く掴んだ。

「痛いじゃない！ 離してっ」

「この盗人め！ 今度こそ捕まえたぞ！！」

ジタバタと小さな身体で暴れて抵抗とするリイマだが子供故、大人の力に勝てる訳がない。

目を点にして二人のやり取りを見ていたアーシィや周囲。

それに気付いたのか、店主は我に振り返りわざとらしく咳払いをした。

「あー、ゴホン。見苦しい所を見られてお恥ずかしいですな」

「その子は本当に泥棒なんですか？」

ふとアーシィは店主に問う。

「そうなんですよお嬢さん！ 開店してから盗みを働いている常習

犯でしてね。いやー、やっと捕まえられましたよ」

ガハハ！ とひとしきり笑うと、怒りに満ちた目でリイマを睨みつける。

負けじとリイマも店主を睨んで抗弁し始めた。

「この時代のお金なんて持っていないのよ！？ 仕方ないじゃない！」

この時代のお金？ 国ならわかるが時代と言われても理解に苦しむ。

とはいえ、アーシイもマーフェ国の通貨は宿に泊まる程度しか持っていないのだ。

盗んだ品を全額弁償するお金など持っていない。

「言い訳するなガキ！ 教会堂で懺悔させてやる、来い！！」

そう言つと、店主はアーシイに会釈をして元来た道を歩き始めた。

同時にリイマも引きずられるように連れて行かれる。

「私は何も悪くないわ！ コーレア助けて！」

「だからアーシイだってばーっ！」

片腕をアーシイに伸ばして助けを求めるリイマだが、徐々に距離が離れていくにつれ諦めたらしい。

盗みを働いたのだから、教会堂で懺悔させられても仕方ないよね。

それでも少しばかり助けてあげられなかった罪悪感からか、アーシイは思わず大声でリイマに叫ぶ。

「リイマ！ あとで必ず教会堂へ迎えに行くから！！」

声が届いたのか、遠のいて行くリイマは無言で何度も頷いたように見えた。

「はあ、やれやれ……」

店主とリイマの姿が見えなくなり、静まりかえっていた周囲も先程のような賑やかさに戻っていた。

日が暮れる前に宿を探そう。それから、あの子を教会堂まで迎え

に行く。

肩に掛けている荷物をしっかり持ち、気を取り直してゆつくり歩き始めた時だった。

「なあ荷物を肩に掛けてる姉ちゃん」

誰に声を掛けているのかわからないけど、もしかしたら私？

アーシイはゆつくり振り返ると、一人の青年が腕を組んで立っていた。

外見からしてアーシイと同年か年上の風貌だ。

青年の黒い短髪がサラサラと風になびく。碧色の澄んだ瞳に鈍い光が帯びている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667v/>

コーレアの鐘が鳴る

2011年10月9日11時49分発行